

<共同研究報告> 『太陽』創刊号の反響

著者	大和田 茂
雑誌名	日本研究：国際日本文化研究センター紀要
巻	13
ページ	89-96
発行年	1996-03-31
その他の言語のタイトル	Reactions to the first issue of Taiyo
URL	http://doi.org/10.15055/00006195

〈共同研究報告〉

『太陽』創刊号の反響

大和田 茂

1. 各紙誌にあたつて

一八九五（明治二八）年一月五日付けで創刊された『太陽』（博文館）が、当時の人々にどのように受け入れられたのかという問題については、すでに永嶺重敏が「明治期『太陽』の受容構造」（『出版研究』第二二号、一九九一年一〇月）でかなり詳しく調査、分析している。永嶺は「従来の思想的方法では、思想的個性の弱いこの雑誌の意味は充分には捉えきれていなかった」として、先行していた雑誌『国民之友』と対比させつつ、同時代の新聞雑誌の批評や記事を駆使して『太陽』における「雑誌スタ

イル・読者層・受容様式」の三点から考察を試み、この雑誌出現の意味を探っている。

今回、筆者が触発され、参考としたのは、この論文の第一章「『太陽』の登場」で、

ここで永嶺は、創刊号を中心とした反響記事を媒介に、『太陽』がとった編集スタイルの斬新性を強調している。永嶺が取り上げた紙誌の記事は一件であるが、筆者はこの数は当時の新聞・雑誌発行状況に鑑みてかなり少ない、創刊号に関する記事はもっとあるはずと考え、可能な限りほかの紙誌にもあたってみた。その結果が下記に示した一覧である。総計二七件、時間をかければほかにもまだ出てくると思われるが、

とりあえず以下、特記すべき点をいくつか報告をしたい。なお、すべて一八九五年発行のもので、へゝで示した以外は無署名、※印は永嶺論文に登場した記事である。

①新聞

博文館発兌の太陽

萬朝報 六三〇号 一月八日

太陽

都新聞 三〇〇二号 一月八日

新刊書 太陽 第一号

中外商業新報 二八五九号 一月一〇日

新著批評 太陽（第壹号）

報知新聞 六六四二号 一月一〇日

※新刊雑誌 太陽一号

時事新報 四一七七号 一月二日

※太陽(第一号)

東京朝日新聞 三〇三九号 一月一六日

新著紹介 太陽 第一号

二六新報 三四七号 一月一七日

太陽 第一号

国会 一二三七号 一月一九日

最近出版書 太陽(第一号)日本橋本町博

文館)

読売新聞 六二七七号 一月二〇日

新刊紹介 太陽第一号

国民新聞 一五一三号 一月二日

太陽第一号

大阪毎日新聞 四〇〇七号 一月二三日

②雑誌

※新刊『太陽』

国学院雑誌 第一卷三号 一月一〇日

時文月旦『太陽』第一号へはしづくよ

早稲田文学 七九号(第一次) 一月

一〇日

※太陽

東京経済雑誌 七五九号 一月二日

※批評 太陽第一号

精神 四八号 一月一五日

時事 太陽

国光 一三号 一月一六日

蒐録 新刊雑誌の『太陽』と『帝國文学』(井蛙生)

反省雑誌 第一〇卷一号 一月二〇日

※太陽

女学雑誌 四〇六号 一月二五日

※新刊紹介 太陽 第一卷第一号

教育時論 三五二号 一月二五日

太陽の発刊

教育報知 四五八号 一月二六日

時文 太陽、少年世界

文学界 二五号 一月三〇日

※太陽 第一号

国民之友 二四四号 一月三〇日

※紹介 新著批評 太陽 第壹号

智徳会雑誌 一三号 一月三一日

新刊畧評 太陽

少年園 一五一号 二月三日

※批評 太陽(晩眠生)

立憲改進黨党報 三八号 二月二日

時文『太陽』第一号(青年文記者)

青年文 第一卷一号 二月一〇日

「太陽」の小説を評す(佐々醒雪)

帝國文学 七号 七月一〇日

③調査したが、『太陽』創刊号に言及がなかったもの

毎日新聞 中央新聞 日出新聞 家庭雑誌

自由党党報 進歩党党報 心海 東京

独立雑誌 歌舞伎新報 女鑑 六合雑誌

婦人新報 日本人 穎才新誌 団々珍聞

2. 「未曾有の大雑誌」

筆者が当たった紙誌の三分の二ほどに共通する評価は、何と言っても『太陽』の規模の大きさに関してであった。これは永嶺の称する「雑誌スタイル」の新しさ、すなわちあらゆるジャンルを包含しようとする「百科総覧的膨大さ」に関係するものだが、

たとえば「我国未曾有の大雑誌なり」（都新聞）「我邦未曾有の一大雑誌と云ふべし」（大阪毎日新聞）「『太陽』は巨大なる雑誌なり、其所載の項目亦夥し」（青年文——記者は田岡嶺雲）「我が国未曾有の大形雑誌と聞こえたる『太陽』第一号出づ」（早稲田文学）というような言葉が各紙誌を飛びかい、まずは四六倍判「二百余頁の大冊」（国民新聞）という当時としては破格の大きさに、誰もが衝撃を受けている姿が浮かび上る。『知徳会雑誌』にいたっては「雑誌には相違なきも吾人は終にこれを雑誌として待遇することを得ざるなり」と戸惑いすら見せている。

『太陽』以前において総合雑誌の代表格のひとつである民友社の『国民之友』は、ページ数が通常五〇ページ、最高の発行部数が二万部であり、文芸雑誌『文学界』にいたっては平均三〇ページ余、創刊号発行部数は再版も含め二五〇〇部という規模であった。その他の専門雑誌などにしても多くて一〇〇ページを超えることはめったにな

かったようだ。このような雑誌発刊状況の中で、日清戦争の勝利により新時代を迎えるにあたり、それまで博文館が出していた十数種の諸雑誌を整理統合して、この大総合雑誌を出したことは人々を瞠目させるに充分で、しかも発行部数はいささか誇張はあるものの二八万五千という桁違いの数字だった。

これと同時に多くの記事・図版でこんな大部の雑誌がたった一五銭という値段も、驚きをもって迎えられた理由のひとつである。「『当代第一流の諸名家をこの一卷に集む而して其の価値かに十五銭なり』と云^{いふ}に至つては吾人は其至廉なるに驚かざるを得ざるなり」（報知新聞）「然り而して此大々的雑誌価値かに十五銭とは博文館主の胆玉も又随分太からずや否歟」（智徳会雑誌）と驚きの声が各所から起こる。永嶺も述べているように、薄利多売を旨として、都市中産階級層や学生をターゲットに幅広い情報誌を目指したのである。当時、ビール大罎が一五銭前後、通常七〇ページぐらいの

『国光』という雑誌が一三銭であるのに対して、本文だけで二二六ページの『太陽』創刊号一五銭はやはり安いというべきだろう。

さらにもうひとつの評判は、高度な写真銅版技術による口絵や鮮明な挿絵がふんだんに掲載されているということである。

「太陽」一号は博文館より発行する雑誌にして紙数の多きと色々様々の事柄を掲げたるは外に類のなき所ならん殊に各大臣両院議長^の肖像もあり其外美麗の挿画もありて読者の目を喜ばす便利の雑誌と申すべし」（時事新報）「加ふるに挿むところの各大臣上下両院議長副議長の肖像さては諸種の画図の如き皆一代の画伯が手腕を揮ふて名匠が版に付せしもの」（報知新聞）「最も吾人の眼を惹くものは其朧夜流の挿画の艶麗なる事なり」（国民新聞）「且つ挿入の絵は頗る鮮明にして西洋雑誌の画色も及ばざるところあり」（国民之友）というように、『太陽』は目でも楽しめるビジュアルマガジンの要素を持っていたことを示している

のである。

そもそも日本において写真銅版を導入したのは、日清戦争を機にしてであった。坪谷善四郎著『博文館五十年史』（一九三七年六月）には、『太陽』創刊の前年（一八九四年）八月末に出された『日清戦争実記』（月三回発刊で、五〇篇で完結）でその最初の試みが成功したと記されている。

当初館主の海外視察を了て帰朝せらるゝや、最新の技術を応用して出版に試みんと期せしに、偶々此時写真師小川一真氏は、その頃諸外国に行はるゝ写真銅版の技術を我国にも利用せんと欲して来り勧めた。是まで我国雑誌の人物肖像は、専ら石版のみを用ひたが、『日清戦争実記』は始めて写真銅版を採用し、出征の陸海軍人を首とし、日清韓三国の時局に活躍する主要の人物写真を集めて盛んに巻頭を飾り、それに戦局地図を添へ、本文記事は三国従来との関係より開戦に至るまでの経緯を詳述して戦況に及び、記事と写真を相

待ち、従来比類なき雑誌を発行したれば、当時敵愾心の最高潮に達したる全国民の要求に適合し、本誌一たび出でて忽ち雑誌界を風靡し、九月九日第二編の出るまでに、第一編は既に数版を重ねた。（中略）

この『日清戦争実記』の好評を博した原因は種々ある中で、始めて写真銅版を利用したといふことが与つて大である。（後略）

日本で初めての近代的大戦争をよりリアルに報道するためには、雑誌の生命線とも言える写真製版の技術を向上させることが要請された。そこで博文館は他社に先んじて写真銅版技術導入に成功し、『日清戦争実記』は空前の売れ行きを見せた。そして、ほぼ四か月後の『太陽』創刊に対し、博文館（中でも両雑誌の編集長格であった坪谷善四郎）はこの点を見逃さず、『日清戦争実記』を上回るページ数の口絵などを入れ、雑誌のビジュアル化を図つたのである。なお、小川一真はアメリカで写真技術やコロ

タイプ印刷術を学んだ人物で、そのころ写真館や写真製版所を経営したり、写真家としても多彩な活動をした。

かつてない分厚い雑誌『太陽』の中には、多様なジャンルの記事・論説・創作・図版が盛りだくさんに掲載され、読者は必ずしも最初のページから読んでいくという形をとらず、自ら興味のわくところだけを読み、または目で見たいというような受容の仕方を取つたのであろう。これも当時では、新しい雑誌の読み方だったはずで、たとえば家族がそれぞれ読みたいジャンルや記事だけを部分読みしていくことを想定して編集されたらしい。であるから、本文ルビについて言えば、家庭欄や創作欄など、女性や若年者などが多く読む欄には、総ルビが付されていたりで、記事によっては、パラルビ、あるいはルビなしのところがかなりある。やはり読者対象を記事によって分別していると考えられる。

3. 「百科総覧的」ということ

さて、規模や図版では人々の驚愕を誘った『太陽』であったが、その内容においてはどうか。論説、史伝、文学、家庭、政治、法律、芸術、科学、商業、農業、工業、海外思想、ほとんどあらゆるといっているほどの分野についての情報を伝えようとする「百科総覧的」雑誌への見方は、さまざま評価を生んでいる。

むろん中には、引用は省くが、『中外商業新報』『大阪毎日新聞』『国光』などのようにごく簡単な内容紹介でコメントらしきものもない記事や、『都新聞』（我が国未曾有の大雑誌なり大家の議論林の如く有益なる記事山の如く其他鮮明なる図画あり快活なる文苑あり其総員数は二百を超へ夫れで定価十五銭とは実に安い物なり）、『東京朝日新聞』（未曾有の大雑誌現はれたる紙数二百五十ページ名文山の如く大家林の如し）『東京経済雑誌』（巻首には現内閣諸大臣の鮮明なる肖像あり、巻中には文学

及び科学に関する専門大家の論文ありて読み沢山の好雑誌なり、雑誌ありて以来未だ此の如き大雑誌はあらず）のようにひとあたり最大公約数的賛辞を呈して、内容に立ち入らないものもある。しかし、あとほとんどがこの「百科総覧的」大雑誌に対し屈折した評価を下していると見てよい。

それは何かというと、まず「雑駁」という評語が散見できることである。むろんこの「雑駁」という言葉には、否定的な傾向が支配している。たとえば「若し夫れ雑駁なるは學術の普及を計るが爲めにして是れ則ち太陽の太陽たる所以なりと云はゞ余輩何をか云はん」（立憲改進黨党報）、「其材料の豊富なる丈に雑駁に失し、是を以て纏まりたる思想を得んと欲することは難かるべく、太陽もまた纏まりたる思想を伝ふるを以て自期するものにあらざるべし」（教育時論）、「とにかくにも斯る大雑誌は博文館ならでは出し得まじ、また博文館ならでは決してかゝる雑駁無性質の雑誌は出すまじ。即ち博文館相当の雑誌といふべし」

（青年文）という論調においては、『太陽』はまとまった編集方針を持たずひたすら多くの記事を載せ無秩序だという批判である。だが、逆にこの「雑駁」的特徴は、ひとつの主義主張をもって編集せずに、多くの論説、情報を多面的に提供するものとして高く評価する声もかなりあった。

『読売新聞』の「……其欠点は所謂博文館ものにて雑駁なりとの非難を免れざることも、併し雑駁なるは却つて智識普及を計る方便にして即『太陽』の『太陽』たる特質は此処にあることも……」や、『早稲田文学』の「吾人は『太陽』の雑駁に傾きて、動もすれば曩日の『大家論集』とさしたる徑庭なきに終はらんかを恐るる共に、其の国民の普通智識を進めて、学問の弘通を賛くるの効大なりを信するなり」『太陽』の包容する所は広、文学者も読まざるべからず、政治家も読まざるべからず、一科を討究するに意なきも広く天下の智識に接して自家の偏見固陋を破らんとするものに向ては、吾人特に此の雑誌を推薦するに躊躇

せじ、所謂雑誌の本意はここにあればなり」というように、「雑駁」ゆえにかえって一党一派に偏せず広く情報提供の場としての役割が果たせるという考えも提示されている。

ここでの「雑駁」とは見方によっては欠点でもあり、長所でもあるといえる。要するに評者が雑誌というものをどう考えるかによって、『太陽』の評価が分かれてくるのである。

創刊号巻頭、大橋新太郎が書いた「太陽の発刊」には、「今『太陽』の期する所は普く専門諸大家の力を集め、広く中外諸人に紹介して以て相互の智見を交換せしめんとするに在り。是我が『太陽』が当代第一流の諸名家にのみ執筆寄稿の労を請ひ、成るべく平易に成るべく趣味多からしめんと力むる所以なりとす」とある。ここには、広く浅くでもやはりより多くの知識、情報を掲載し普及していくことを第一の編集方針に据えていたことが明白に読み取れる。創刊号に限らず、各号まさに当時の大家と

いわれる学者、文人、評論家を並べて、口述筆記や講演速記録、またしばしば他の雑誌書籍からの転載によって誌面を作るノウハウはすでに『日本大家論集』以来博文館の得意とするものだったし、ときには相反する論調が無造作に隣り合わせに載る。こんなところが「雑駁」との声が異口同音に起こるところであろう。しかし、博文館ではこんな批判は少しも意に介さなかったろうし、むしろ我が意を得たりとの心境であったのではないか。

ただ執筆者は一流の人物でなければ意味がない、内容が「雑駁」のうえに二流、三流のメンバーでは雑誌は売れるわけではないのだから。この大家主義については不思議にほとんどの紙誌がこだわりを持っていないが、ただ、これを真っ向から論難しているのは、『反省雑誌』の井蛙生である。彼はつぎのように激しく攻め込んでいる。

され大を誓ひたるこの雑誌は、其の名の如く、果して一切現象の真面目を公平に自然に映照し得と断言するか、

其の光とも力とも頼む大家の、真に大家たる価値をまづ那辺に求むるか、何等の標準に依り、何等の見解を以て、大家と非大家とを判別し、大家を推し、非大家を排するか、世間は広し、名のみて実なき人も多からんに：（後略）

さらにこの井蛙生は、全体的に『太陽』の「愛読者」として好意的な批評を展開しているのだが、『太陽』の啓蒙主義的傾向、「成るべく平易成るべく趣味多からしめん」とする編集方針に不満の意を表し再考を促している。『太陽』創刊の四年後に『反省雑誌』は誌名を『中央公論』と変え、仏教評論誌から総合雑誌へ脱皮し、『太陽』と並ぶ大雑誌に成長していくが、後年、この雑誌の名編集長といわれた滝田樗陰などが新人作家登用に手腕をふるったり、同誌が日本の言論界をリードする雑誌として重厚な存在になっていくのを思うにつけ、すでにこの『反省雑誌』の時代から『太陽』とは対照的な進み方を画すような萌芽がここに見えるというのは過言であらうか。

『反省雑誌』以外にこの大家主義、網羅主義に関して批判的なのは、『早稲田文学』のはいづくよという人物で、彼は文章の平易は容認できても「吾人の本欄（『論説』欄をさす）に対する希望は、力めて創作の論文を掲ぐるにあり、平凡なる演説筆記、旧著の抜粋などは、いかに大家なればとて、さまで有り難からざる心地すべし」（カッコ内は引用者）というように、『太陽』の談話筆記や他からの再録を主にした編集方法へ不満を述べ、オリジナルな記事を強く求めることにより、この雑誌のいわば致命的とも言える弱点をついているのである。

4. 外国雑誌の模倣か

その他、注目すべき批評としては、『太陽』が創刊するに当たって手本とした外国雑誌は何かという小さな議論がある。『二六新報』は、「一言に之れを評せば本誌は夫の有名なるレヴュー、オブ、レヴュースに似て彼よりは数層の上にありと言ふを得べき歟」と書き、『文学界』は「編輯の体

裁は一見米の『ハーバース』独の『あづまや』の如き観あり」、「『女学雑誌』は「体裁は『評論の評論』に拠るものの如し」と、それぞれ短いコメントながら、アメリカ（あるいは英国）の総合雑誌『THE REVIEW OF REVIEWS』[Harper's]（以下、日本語表記する）などを連想、近似性を認めている。

しかし、一方では『少年園』の記者は、「二三の雑誌にこれを彼の有名なる評論の評論に擬したるものありしは、何の意なるを知らず。其体裁部類の区分はいふも更なり、雑誌の目的主旨に至るまで、更に相類する痕迹だも認むる能はず、然るに尚これを以て評論の評論に似たりといはゞ、彼の記者ステイド氏は、これを聞きて憤泣せん」と、おそらくは上記二紙誌を念頭に置いてであろう、かなり強い調子で反論している。

この見解の対立をどう見たらよいのか。たしかに『太陽』の「海外思想」欄には、『ハーバース月報』[Harper's new month-

ly magazine] や『評論の評論』などからの抜粋記事が転載されていて、これら欧米の雑誌と『太陽』が無関係ではないことを物語っているし、多くの記事を載せている総合雑誌という点では一見似かよっているようにも見える。だが、約一三〇ページの『評論の評論』については、多彩といっても世界の動きを主要記事に、ひと月分の新聞記事の抜粋や書評、人物伝など、必ずしも大衆向きとは言えない内容で、実用的な記事などなく、多彩な編集構成にはなっていない。対象とする読者層がはっきり違っているようだし、『太陽』との近似性はないと言つてよい。

この点では『少年園』記者の見方は正しいと思われるが、もうひとつの『ハーバース』の方は、絵や写真をふんだんに使い世界の話題・情報をできるだけ多く伝えようとする姿勢が伺われるし、『評論の評論』より大衆向きである。どちらかと言えば、情報誌という観点からは、『太陽』は『ハーバース』に近い。しかしこの点以外には、

この雑誌とも目立った類似性は認められない。創刊にあたって、これら外国の雑誌を大いに参考にはしただろうが、博文館はそれらとまったく同じような雑誌を出そうとは思えなかったといえよう。根本的には、博文館の独特の個性が生んだ雑誌だと思われる。

ところで、創刊号には、尾崎紅葉の「取舵」、饗庭篁村の「従軍人夫」という小説が掲載されている。このやはり大家の二篇に詳しく言及しているのは、『帝国文学』『反省雑誌』『女学雑誌』『文学界』などで、篁村の作品は、「軽妙洒脱の筆」「さすが老練の筆とやいはん」と評判はいいが、紅葉作とされる「取舵」には、作者が真に紅葉なのか疑義が提出されている。すなわち現代では、これは紅葉門下の泉鏡花が「ながし」の名で書いていた時代の作であることは周知の事実で、現に『鏡花全集』第一巻（岩波書店、一九七三年）に収録されている。このことをたちまちに見抜いたのは、実は『文学界』記者だけであり、彼はつぎ

のようにあざやかな推理を働かせている。
紅葉子が取舵といふ小説はながし、作の筆法に同じ。ながしとは門下の泉某氏なる由、義血、俠血が某なれば取舵も某ならむ、取舵が紅葉ならば義血、俠血も紅葉ならむ。

この『文学界』の「時文」欄担当者の正体を知りたいところだが、即断はできない。だが、あれこれと推理すれば、同人の戸川秋骨か平田秃木に絞られる。いずれかであることは確かといつてよい。一方、『帝国文学』の佐々醒雪は、「而して其文章はながし時代の作に等しく」「紅葉の作としては頗る不出来なる者の一なり」と述べ、同様に『反省雑誌』の井蛙生も「近來むつかしき漢語を多く用いられたる子が文体は……」とやはり紅葉作であることをかすかに疑っているものの、紅葉直筆を否定していない。今から見ると、おもしろい現象である。

以上のように『太陽』創刊号には、当時多くのさまざまな批評・紹介記事が出たと

いうことが明らかになったと思う。このほか小さなことでは、一二ページに及ぶ英文欄が設けられたことは、日本の雑誌界にとって画期的であつたのに、それにあまり注目する記事がないこと（永嶺によれば英文を解する読者が少なくこの欄は翌年には廃止され、また縮小され復活するという）、『早稲田文学』のはしづくよが宗教欄を欠いていると指摘し、そのためでなからうが次号からそれが設けられたというようなことなど、細かい点もほかに多々あるが、今回はこれにとどめたい。

（付記） 引用文等については、原則としてルビを省き、旧漢字は新漢字に、変体がなはひらがなに改めた。